

て、その汚を散くかのように、じつと動かなかった。遠目には満々と水をたたえて美しいこの湖も、近づくとつれて汚れが目立ち、時々、大きなフナが銀色の腹を見せて浮いているのも何か暗示的で不気味であった。

十一時近く終点美浦柳に着く。子どもたちはシャツ一枚になってもまだ髪を汗でぬらして走りまわり、石によりのほり、裏の湖でタンカイを採る。あくことなく叫び笑い、そしてころげまわる。所在なげにテレビを見ているいつもの彼と何という違いだろう。

「もう帰ろうか。」というとき、「あと九万年も、ここにいたいよ。」といった。これを聞いて、私は、この自然をどうあっても守っていかなくてはいけないのだと、素朴な気持ちで、くりかえし思ったのである。

了

私は盛んな青麦の香を嗅ぎながら出掛け
て行った。右にも左にも麦畠がある。風が
来ると、緑の波のように動揺する。その間
には、麦の穂の白く光るのが見える。斯う
いう田舎道を歩いて行きながら、深い谷底
の方で起る蛙の声を聞くと、妙に私は押し
つけられるような心地に成る。可怖しい繁
殖の声。知らない不思議な生物の世界は、
活気づいた感覚を通して、時々私達の心へ
伝はって来る。